

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2018.12.31

VOL

145



直坂Ⅱ遺跡出土品(富山市直坂字文次郎開割・狐塚割)
《搔器》

この石器は旧石器時代のもので、直坂Ⅱ遺跡のもので。

しずくの形をしていて、道具であると同時に芸術品のようですね。

とっておき埋文講座 ● 特別展「旧石器時代とはどのような時代だったのか！」

● 大境洞窟 調査100年

埋文あらかると ● 富山の歴史出張プロジェクト

行ってこれよ ● 越中国分寺跡

富山県埋蔵文化財センター

特別展「旧石器時代とはどのような時代だったのか！」

とっておき埋文講座①

「それは... 日本に象がいた頃」

この秋、埋蔵文化財センターに再現した旧石器時代の森には大きな象がいます。

今年の特別展では、わからないことが多いといわれる旧石器時代をとりあげました。昨年、開館40周年を迎えた埋蔵文化財センターですが、旧石器時代に特化した展示は実に初めての事です。

日本における旧石器時代の始まりについては諸説ありますが、およそ4万年前頃といわれており、富山県内では約3万年前から人々が暮らし始めたことがわかっています。そんな旧石器時代について、4つのコーナーから迫っていきます。



展示室前でお出迎え

I 旧石器の自然環境

現在は縄文時代から続く暖かい間氷期で、それ以前の旧石器時代は氷期の真っ只中でした。平均気温は現在よりも7~8℃低く、当時の富山は現在の北海道に似た気候だと考えられています。

寒冷期には海水面が低下したため、日本列島は大陸とほぼ陸続きのような状況でした。北方系のマンモス、ヘラジ

カや南方系のナウマンゾウ、オオツノジカなど大型哺乳類が存在したことが日本各地で出土する骨化石からわかっています。植生の様子も現在とは異なり、高山に見られる針葉樹や木の実が平野部に自生していたと考えられます。

展示では自然環境にまつわる図や写真から、寒かった時代背景を紹介しています。

II 富山県の旧石器

県内には旧石器時代の遺跡が約140あり、このうち約30遺跡で生活の跡を確認しています。特別展では当センター所蔵品を中心とした26遺跡、約300点の石器が一堂に会しています。



約3万年前の道具たち

石器は技法や年代から大きく6つのグループに分け、遺跡ごとに展示しています。

● 小型ナイフ形石器群

後期旧石器時代の初め、日本各地で確認される小型剥片ほくへんを使うナイフ形石器で、局部磨製石斧せきよくぶ ませいせきぶと呼ばれる石斧と一緒に出土するのが特徴のひとつです。

立山町のほか南砺市の立野ヶ原丘陵たでのがほらで数多く見つかり、展示では、鉄てつ石英せきえいやメノウなど地元で産出される石

材を多用していることも着目ポイントです。

● 石刃ナイフ形石器群

後期旧石器時代前半、東日本を中心に使われた縦長剥片から作るナイフ形石器です。

上市町教育委員会から資料をお借りした眼目新丸山遺跡さつかしんまるやまは1948年(昭和23年)、北陸で初めて発見された旧石器時代の遺跡として有名です。

富山市直坂 I 遺跡すくさかの接合資料は、バラバラに出土した複数の剥片が接合し、割る前の原石の状態に復元できる資料で、石器製作の技術がわかる貴重なものです。

● 横剥ナイフ形石器群

近畿、瀬戸内地方を中心に分布する横長剥片から作るナイフ形石器です。

先の縦長剥片が東日本系であるのに対し、この横長剥片は西日本系。東西両方の技法が見られる富山県は国内でも非常に珍しい地域と言えます。従来、富山県は東西文化の混在・融合する場所と考えられてきましたが、はるか旧石器時代にその源流があったとは！ビックリです。

● 尖頭器石器群

後期旧石器時代後半、ナイフ形石器やりさきかたに代わり、槍先形の石器群が現れます。

南砺市立美遺跡たつみの尖頭器をはじめとする石器は黒曜石で、分析の結果、青森県深浦産であることがわかりました。直線距離はなんと約540km! 旧石器人の遊動生活やルートを考える上で大変興味深い資料です。

さいせきじん
● 細石刃石器群

後期旧石器時代終末期、国内で広く作られた、極めて小さな剥片を複数組み合わせ合わせて道具としたものです。県内で剥片は確認されていませんが、小矢部市日の宮遺跡では剥片を剥ぎ取った残りである石核が出土しています。

みこしば
● 神子柴文化系石器群

旧石器時代最終末から縄文時代草創期にかけて現れる東日本中心の石器群です。長野県神子柴遺跡で出土した大型・精巧な石斧や尖頭器と似た様相のものです。

富山市直坂Ⅱ遺跡や南砺市南原D遺跡で、表裏を入念に加工した尖頭器や、縄文時代への過渡期とみられる石鏃などがあります。

III 旧石器人のくらし

ある日の旧石器人として衣・食・住をジオラマ復元しています。

国内の遺跡から衣服の出土例はありませんが、身体の保護・保温には着衣が必要と考え、皮革製の衣服を復元しました。

食では焼けた礫の出土例などを参考に調理風景を考えました。みんなの憧れ、骨付き肉も良い具合に焼けています。このほか骨を打ち欠き骨髄を利用したり、アク抜きの要らない木の実や果実類を採集していたと考えられます。

住は発掘調査でみつかった柱跡から、簡単なテント状の住まいを復元しました。

ある日の旧石器人たちはそれぞれ狩りや料理、皮なめしなどの作業中です。ぜひ彼らのくらしぶりを覗いてみてください。



旧石器人のクッキング

IV 旧石器研究最前線

展示室に入るとすぐに目に飛び込むのが実はこのコーナー。



人気者！実物大「港川人」

アルカリ性土壌が多いため骨が残りにくい沖縄は今、旧石器研究のホットスポットです。

50年前に発見された港川人は最新の研究をもとに、沖縄県立博物館によって全身模型がリニューアルされました。153cmの彼の隣に並ぶと、現代人との違いがあれこれ見つかって興味は尽きません。このほか石垣島の白保しろほ竿根田原洞穴遺跡など、沖縄県での最新調査について紹介しています。

また、長野県の野尻湖ナウマンゾウ博物館での50年にわたる発掘調査の

成果についても紹介しています。実物大のナウマンゾウの臼歯や牙、ヤベオオツノジカの角など、大きさを実感してもらえるよう心がけました。



湖底堆積物「年輪」

さらに自然科学の最新分析として、年代測定の分野で世界から注目を集める福井県若狭町の水月湖年縞を紹介しています。「土の年輪」とも言われる湖底堆積物に含まれる炭素量の測定からは、一年毎に異なる過去の大気中の炭素量がわかります。過去7

万年分が測定できる資料として、近年、世界標準に認められたものです。

このほかにも黒曜石の産地分析や石器の使用痕分析など、これまで蓄積したデータや科学的な裏付けにより新しい事実がみつかってきています。

わかりにくいイメージの旧石器時代ですが、石器だけでなく取り巻く自然や、わずかに残された遺物・遺構をひもとくことで、厳しい環境を生き延びてきた私たちの祖先に思いを巡らすことができるのではないのでしょうか。

(町田尚美)

大境洞窟 調査100年

とっておき埋文講座②

氷見市立博物館 館長 大野 究

発見から調査へ

明治40年に氷見市大境沖に新式の定置網がおろされて豊漁が続きました。大境の村の人たちは豊漁が続いたので家を建て替えたり瓦をふきかえたりしました。

大正6年は、春網でイワシが大豊漁で、前年の15倍くらいイワシが獲れています。イワシは肥料に使われてたので非常に実入りが大きいものでした。そこで、大境の村の人たちがお宮さん(白山社)を建て替えようという話が持ち上がります。それまでのお宮さんは、江戸時代に建てられたもので洞窟の中に本殿があるだけで拜殿がないものでした。お祭りのときは本殿の前の地面にむしろをひいてお祭りをしていたので、これを機会に本殿を新しく改築して拜殿も新築しようということになったよ

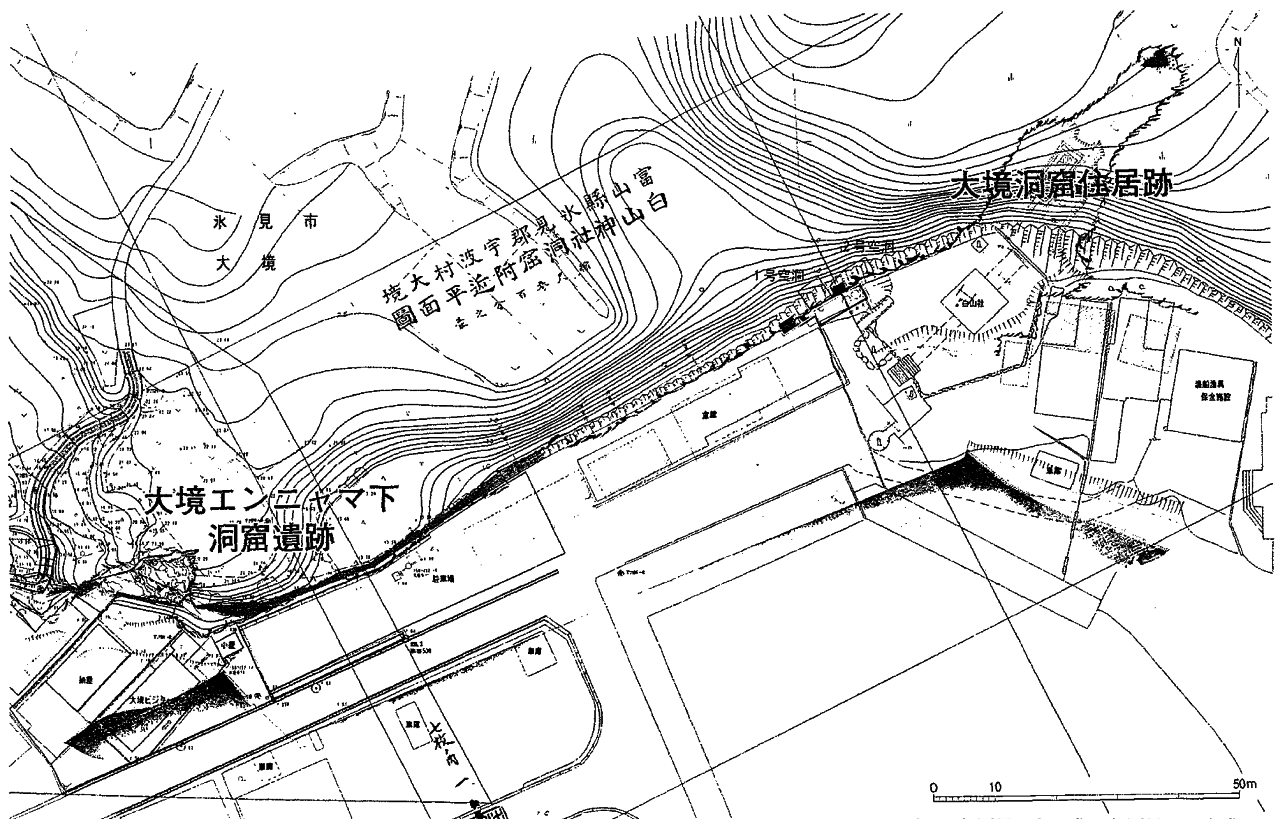
うです。大正6年12月に県知事に申請をし、大正7年6月に許可がおりて工事を始めました。洞窟には天井があるので、本殿を大きくするためには下を掘り下げなければなりません。地面を掘り下げたところそこから土器や石器や骨がたくさんでてきました。そこで駐在さんがきたりして大変なさわぎになりました。

6月20日ごろから遺物の出土がありました。そのさわぎを聞いて新聞記者が現地を訪れます。高岡新報の井上江花です。写真の真ん中で帽子をかぶってステッキを持っている人が井上です。井上の右側に大きな石棒が立っています。石棒がでてきたことが大騒ぎになった原因の一つです。長さ95cmの大型の石棒が縄文時代の中期的のものです。



大正7年7月3日の「高岡新報」の写真

その周りにも土器や人骨がでてきています。はじめは県内のニュースでしたが、7月1日の東京朝日新聞の欄外記事が掲載されました。それを見てびっくりしたのが、東京帝国大学の柴田常恵です。「これは大変なことが富山県でおきている」ということになり、3日の夜行列車に飛び乗り氷見にこられました。そして現地で「これは重要な遺跡ですよ」ということを伝えています。なぜ重



大正7年測量図と平成18年測量図の合成図
(氷見市教育委員会 2013年「国指定史跡大境洞窟住居跡保存整備事業報告書」)

要な遺跡かという点、日本でも大森貝塚などオープンサイトではたくさん調査されていましたが、洞窟の遺跡が発見されていませんでした。ヨーロッパでは洞窟の遺跡がけっこうあり研究されていて日本にも洞窟遺跡がないものかと考えているときだったようです。柴田が目にしたのは、洞窟は落盤によって積み重なるので、洞窟の地層は下が古くて上が新しいことが確定できることです。オープンサイトの場合は自然災害などによって古いものが新しいものに乗っかることがあります。大境洞窟にはそれがありません。大境洞窟は6つの文化層が積み重なっていました。大境洞窟を地層ごとにしっかり発掘していくことで、時間のものさしができるということです。そのことで、当時、縄文と弥生のどちらが古いか地層的にあきらかにすることができました。こうして日本で初めてとなる洞窟遺跡の発掘調査が行われました。

測量図面

柴田常恵は発掘調査をするときに、考古学研究者がびっくりすることをしていました。それは測量図面をきちんととっているということです。現在では遺跡の平面図をとったり断面図をとったりするのは当たり前ですが、100年前は遺跡に行き、土器などの遺物を集めてくるのが普通でした。それぞれの遺物がどの地層から出てきたのかを記録しながら発掘するのはあまり行われていませんでしたが、日本で初めての洞窟遺跡の発掘調査なので、しっかり記録をとらなくてはならないと考えて発掘されたと考えられます。

この時の測量図面が全部で7枚あります。これらは、柴田が調査のときに富山県庁から技師を派遣してもらって、作製させた図面です。1枚目は洞窟の平面図です。これで当時の洞窟の様子がよくわかります。この図面を今から10年ほど前に現地を測量したものと重ねると、ちょうど崖の面などがぴったりと合致します。

このことからとても正確な図面であることがわかります。また、洞窟だけでなく海岸線や漁師さんの倉庫などもかいています。

さらに大境洞窟と同じ海食洞窟の大境エンニヤマ下洞窟も測量しています。この洞窟は今から10年ほど前に急傾斜工事に先立って発掘調査をしており、少量の土器や動物の骨が出土しました。100年前、すでにこの洞窟に着目していたことがわかります。

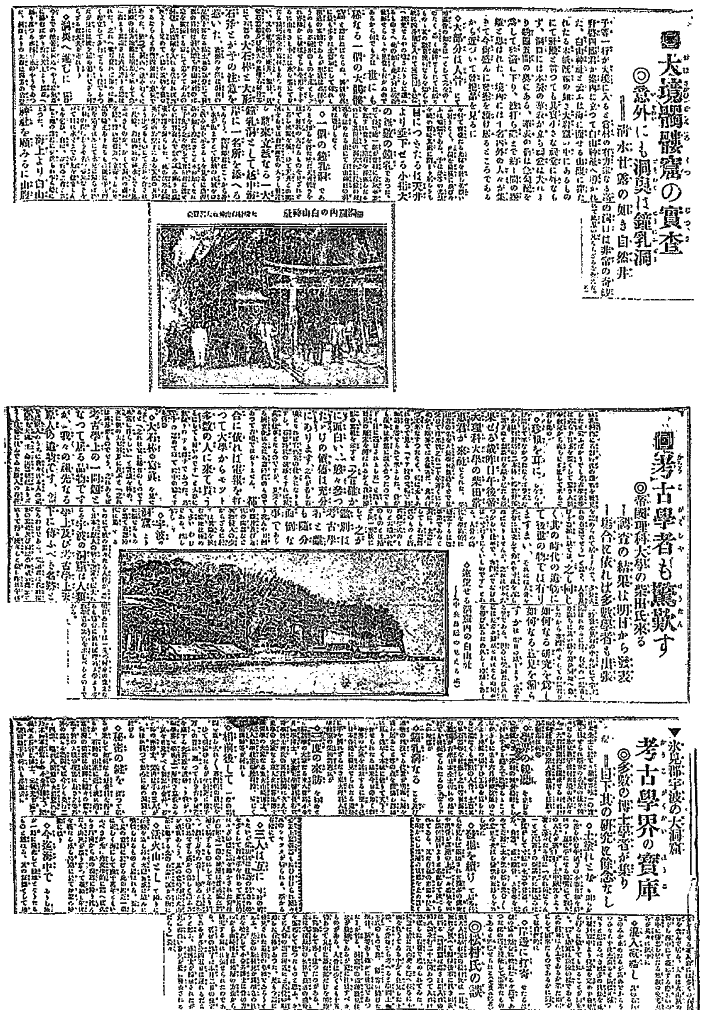
断面図には、地層の積み重なりの様子が書いてあります。上から順に第1層から第6層まであります。この発掘の結果、第6層が縄文時代で第5層が弥生時代という事が分かり、縄文時代が弥生時代の前であることがわかりました。このような測量図面を100年前に作っているということは画期的で、学術的にも貴重であると言えます。

この調査をうけて、大正11年3月8日には大境洞窟住居跡は朝日貝塚と共に国の史跡になっています。このときの指定は、史跡名勝天然記念物の法律ができて2回目の史跡指定でした。最初3回の史跡指定は、古墳や国分寺跡に加えて、箱根関所やシーボルト屋敷など新しい時代のものが多く含まれていました。その中で縄文時代としては初めて、大境洞窟と朝日貝塚が指定を受けたのです。富山県の史跡としても初めてのものだったので、大正時代に指定された史跡が富山県にあるということは大変意味のあるものでした。

新聞記者 井上江花の視点

柴田常恵らによる調査を何度も取材したのが井上江花でした。

一番上の記事は大正7年の7月2日の記事で、初めて取材したときのものです。「大境洞窟」を書いてあります。いかにも人目を引くためのものですが、柴田常恵が来県した7月5日には、「すごい遺跡ときいた」ということを記事にしています。さらに、発掘調査が終わったころの10月3日には「考古学界の宝庫である」と記事にしています。はじめは興味本位だったのが、中央からきた学者に取材をして記事を書く中で、最後には遺跡を保護し地元にも遺物を置いておくべきだという自分の考えを記事にしています。大境洞窟の発掘調査は新聞記者にも恵まれて、非常によい報道をされていると思います。



「高岡新報」記事から(上:大正7年7月2日、中:大正7年7月5日、下:大正7年10月3日)

洞窟についての話

大境洞窟は南西方向をむいて開いています。日当たり良好で北風が入りません。さらに洞窟の一番奥に湧水がありました。地元の人に聞くと昔はたくさんの水がでていたので汲みに行っていたそうです。水も湧いているという事でライフラインがそろっているよい「物件」であったといえます。この洞窟は海食洞窟といって波の作用でできた洞窟です。いつできたかという、縄文時代のはじめころと考えられています。縄文海進のころは、現在より海水面が4~5メートルくらい高かったので、その時期に波があたってだんだんうがかれていって洞窟が形成されたと考えられています。洞窟が海拔5メートルくらいあることもそのことを物語っています。

縄文時代の中ごろになると海水面が現在ぐらいに下がって、洞窟内に海水がはいってこなくなって、縄文人が利用するようになったと考えています。大境エンニヤマ下洞窟も同じ方向をむいているので同様の条件だろうと考えています。

一番下の地層が縄文時代の中ごろになります。大境洞窟は「住居跡」と名前がついていますが、発掘当時住居なのかお墓なのか議論になりました。ただ、調査では貝塚のように動物の骨や貝殻、灰層が確認されたため住居跡とされました。この層からは縄文時代の中ごろから後葉、後期の土器ができています。そのころには、朝日貝塚をはじめ北代遺跡や不動堂遺跡でも住居を作って住んでいます。洞窟にずっと住むというのは違和感があるので、ムラが別にあって、洞窟へは出稼ぎにきていたのではないかなと考えています。ここに来れば、海の幸、山の幸を手に入れることができます。大境洞窟の第6層と並行する一番近い遺跡は朝日貝塚になります。二つはひょっとしたらつながりがあるのかな、と遺跡分布から予想することができます。

大境洞窟と朝日貝塚は9kmくらい離れていますが、縄文人は舟ももっているので、海上を行き来したのではないかと考えられます。つまり、大境洞窟を利用したのは朝日貝塚の人たちだったかもしれないという事です。

大境洞窟からでたものという、動物の骨が多くでています。動物の骨の中で一番多いのはシカとイノシシです。シカやイノシシは食べるだけでなく、骨にも価値があります。骨角器といって骨や角でいろいろな道具をつくっています。そういった骨角器もたくさん出土しています。

第6層の上ののっているのが第5層です。弥生時代の初め頃の地層になりますが、弥生時代というのは、日本列島全部が縄文から弥生に一齐に変わったわけはありません。九州の方からだんだん広がっていったものです。

北陸のあたりに弥生時代の文化が到達するのは前期の終わりの方と考えられています。時間差があるので、縄文時代最後から弥生時代に切り替わる頃が第5層です。氷見で一番初めに弥生文化が入ったのは大境洞窟です。大境は海から集落があつてすぐ後ろが山になっています。弥生時代は米作りの時代と教科書に出ていますが、氷見に弥生時代が来たといってもコメを作るところがないではないか、つまり氷見に弥生文化を持ち込んだ人は漁労民だったのではと考えられています。このあと、なかなか氷見で弥生時代の遺跡が増えません。氷見では中期の遺跡がいくつか見つかっていますが短期間で途絶えてしまいます。後期の後半から弥生時代の遺跡がふえはじめます。これは氷見だけではなく富山県の特徴であるといえます。

その後の大境洞窟は、弥生時代の終わりの頃の地層があつて、古墳時代、奈良・平安時代、中世(室町時代)と続きます。江戸時代には神社があるという記録があります。いつまで住居跡であるかという問題がでてきます。第4層の弥生時代の地層では、派手な装飾、赤く塗っ

たりするものが出てきます。住んでいたというよりは、祭りを全部でする場所だったのではないかと考えることができます。それは古墳時代もそうです。また、奈良時代のころになると、製塩土器がでてきます。口がらっぽのような形をしていて、底を地面に突き刺して海水をいれて煮詰めて塩をとるものだったと考えられています。

中世になると、四角い石の先端がとんがっているような板石塔婆などの石造物があります。石材は大境洞窟周辺の岩盤のやわらかいところを使っています。藪田層と呼ばれる地層なので藪田石といっています。砂よりさらに粒の細かいものです。最近の研究で藪田石の石造物は氷見だけでなく県内一円に流通していることがわかっています。立山や五箇山や黒部にも運ばれています。県内の中世石造物は銘が入っていないので時代を見定めるのが難しいです。輪切りにした断面が正方形になるものが鎌倉時代で、時代が下る断面が長方形になるのが室町時代、15世紀くらいかなと考えています。これはお墓としてたてたり、供養塔としてたてたりするので、洞窟が信仰の場となっていることを表しています。洞窟の壁面を見ると左の方に、小さくほみがいくつか掘られています。ひょっとしたらそこに石造物がおさめられていたかもしれません。

おわりに

百年前に発見・調査された大境洞窟ですが、この遺跡から学べることはまだまだありそうです。皆さんにもこの機会に大境洞窟に興味をもち、できれば現地も訪れてもらえればと思います。

(平成30年9月9日第2回県民考古学講座)

埋文 あらかると

富山の歴史出張 プロジェクト (出張埋文センター)



出張埋文センターの役割

当センターでは、県内の諸学校に対して随時「出前授業」を行っています。各学校からの依頼を受け、伺いますので、「出前授業」の対象は県内の児童・生徒になります。

この「富山の歴史出張プロジェクト(出張埋文センター)」では、県内市町村教育委員会と連携し、イベントでの講演や体験に協力します。対象は県民とし、広く多くの方に我が県の通史や埋蔵文化財について興味・関心をもっていただくものです。

以下、今年度の取組について紹介します。

出張埋文センター in 氷見

11月3日(土・祝)に柳田布尾山古墳まつり実行委員会と氷見市教育委員会の主催で行われた「一発見20周年記念-柳田布尾山古墳まつり」で開催しました。

柳田布尾山古墳発見20周年ということから、「氷見市」「古墳」に因んだ体験をしたいという氷見市教育委員会の提案を受け、「古代甲冑体験」「朝日貝塚出土土器パズル体験」のブース、柳田布尾山古墳館内での活動ということで、「組みも体験」ブースを設置しました。

○「古代甲冑体験」

柳田布尾山古墳館3階で行いました。対象は子供とし、当日先着順で受付を行いました。全7回の予定に対し、7名が体験しました。この古代甲冑は氷見市上田のイヨダノヤマ古墳群から出土した甲冑をモチーフとして作成したものです。

甲冑は自分で着ることができないので、当センターの職員2名が着付けを行いました。

甲冑を身に着けた後は、弓や刀を持って古墳をバックにポーズです。保護者の方々が何枚も写真を撮っておられました。

子供達も古代の武人になりきっていたようです。



<着付けの様子>



<ポーズをとる子供>

○「朝日貝塚出土土器パズル体験」

柳田布尾山古墳館3階で行いました。氷見市の朝日貝塚から出土した土器と朝日町の境A遺跡から出土した土器をモデルにした復元パズルです。土器の復元を味わうことができます。ピースの中には磁石が入っているので、正しく組み合わせるとカチッと付きます。

しかし、どの面と面が合うのかは土器の文様やピースの形をいろいろ合わせてみないと分かりません。たくさんの子供や大人が試行錯誤しながら楽しんでいる様子を見ることができました。



<土器パズルを楽しむ様子>

○「組みも体験」

柳田布尾山古墳館2階で行いました。古代甲冑体験同様に当日先着順での受付を行いました。全7回の体験に対し、47名の方が体験されました。

当センター職員2名と埋文ボランティア2名の計4名が対応しました。初めて組みもに触れる方がほとんどで、最初は難しい様子もありました。しかし、要領が分かるとスムーズに組みもを完成させたり、他の組み方に興味をもたれたりする方もおられました。



<説明をするセンター職員>



<体験補助の埋文ボランティア>

おわりに

当センターでは、呉羽にあるセンターに直接来ることが困難な遠方の市町村への対応もしております。

公民館行事などにも対応しておりますので、関心をもたれたら、「富山の歴史出張プロジェクト(出張埋文センター)」について、お気軽に連絡・問合せしてください。

お待ちしております。 (橘 泰弘)

行ってこられよ —《79》

今度の休日、ちょっと出かけてみませんか。



越中国分寺跡

高岡市伏木一宮

「越中国分寺跡」は現在のところ発掘調査などでその伽藍配置などは確定されていません。しかし、真言宗国分寺の境内とその周辺一帯が「越中国分寺跡」と考えられています。



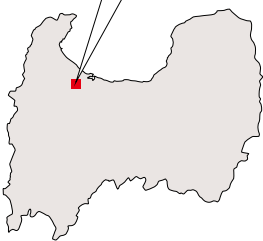
交通機関

JR氷見線伏木駅から徒歩20分

自家用車

能越自動車道高岡北ICから車で15分

北陸自動車道高岡砺波スマートICから車で30分



編集後記

開催中の特別展では、大きなナウマンソウが入り口で皆さんの来館を待っています。当時の自然を再現したジオラマも好評です。ぜひ、センターへ足をお運びください。
(担当 米田)

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」vol.145

平成30年12月31日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814
URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/maibun/>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

